

崇武館  
館長 飛鳥宗一郎  
(宗雄)

## 先人の言葉から学ぶ（その10）

### なせばなる（2） 出典・・・上杉鷹山

#### (9) 吉良による搾取の始まり

以下の話を進めるに当たり、もう一度前月の(7)に触れたい。「幕府高家衆」の吉良上野介義央（1641～1702年）に上杉家三代藩主綱勝（以下、藩主の代を丸囲み数字で記す）の妹・参姫が嫁いでいた。寛文4年（1664年）5月1日、③綱勝は江戸城からの帰途、吉良上野介の招きにより吉良邸に立ち寄りお茶をご馳走になった。帰宅直後から激しい腹痛を訴え、6日後の7日に27歳で急死してしまった。ところが、③綱勝には後継ぎがいなかったため、後継者がなく藩主が死んだ場合は、お家取潰しという掟があり危機に瀕してしまった。

それに対して助力したのが③綱勝の亡き正室・豊姫の父で老中職にあった会津藩主の保科正之（1611～73年。二代将軍徳川秀忠の四男で、正之の2代後から松平姓を名乗る）で、幕閣たちに懇願して回り、「末期養子」という口実をもって将軍より藩存続の許しを得た。

後は養子を誰にするかである。候補の中から決まったのは、吉良上野介の長男で2歳の三之助（死んだ③綱勝の甥）である。会津の殿さまに対する吉良上野介の根回しが効を奏したからと、私は推測している。

幕府は、「末期養子」を認める代償として、米沢藩30万石を半減の15万石にした。徳川幕府の「一を許せば、一を取る」政策からの措置である。

禄高半減に伴う藩の苦悩と窮状は後ほど書



吉良上野介討取りの図（錦絵）

くが、「忠臣蔵」と呼ばれる「元禄赤穂事件」の起因を作り、赤穂藩士に主君の敵として討たれた吉良上野介は、③綱勝の毒殺から始まり、事情を深く知らない保科正之を籠絡して我が子を上杉家に送り込み、藩主に据えた後は遠慮会釈なく金品を貪り取る有様をみれば、飢えた狼に等しい恥知らず行為といえる。そればかりか、上杉藩の政務にまで干渉するおこがましきは、稀に見る執念ときり言いようがない。

三之助改め喜平治から四代藩主となった綱憲は、実父の要求に快く応えて際限なく援助を行ったのである。

「元禄赤穂事件」の引き金となった「刃傷松の廊下」における播州赤穂藩主・浅野内匠頭長矩（1667～1701年）の無念さに対し、多く世人の同情を集めた理由は、吉良上野介の貪欲さに起因すること疑う余地はない。「礼儀指南」「公卿の接待法」などの指導権利をフルに活用して、大名衆から徹底的に搾り取ることに熱い闘志を燃やした吉良であり、つい怒りを爆発させてしまい藩断絶に至ったのが浅野内匠頭であった。

吉良家は表向き禄高4,200石の大身旗本だが、実収は半分程度きりなかったといわれる。それは幕府の「花と実是一緒に与えない」という政策からであった。吉良は贅沢好みと派手な生活を続け、米沢藩に負担させた記録に残る一端を次に記す。1両を仮に今の相場で130,000円程度（本当はもっと価値がある）として計算すれば、④綱憲が藩主であった40年間でいかに多額の金子が流れたのか、正に厄病神であった。

ア 天和元年（1681年）時点の、出入り業者への未払金2,780両の全額を米沢藩に支払わせた。

イ 元禄11年（1698年）吉良邸が類焼により全焼し、新邸を立てる際に米沢から大工50人を派遣した費用、他に建設費の8,000両を上杉藩が負担した。

ウ その後、吉良の買物支払いは毎年6,000両ほどに拡大し、全て米沢藩に付け（勘定書）が回された。

エ 買掛金ばかりでなく、恒常的な生活支援として年間6千石（1石は米150kg）相当を援助した。

オ お盆前や年末になると、米沢藩江戸屋敷に吉良の借金取りが大勢押し掛けた。

## (10) 綱憲の浪費癖

③綱勝が急死して④綱憲が2歳で藩主になった時点で、10月の（8）で述べたように藩の御囲金は20万両以上も残っていた。

④綱憲は、実父の吉良上野介に対する経済援助ばかりでなく、「幕府高家衆」の家に生まれた血筋からか長ずるに及んで父の上野介に倣い、豪華な生活と派手好みが一層増長し、藩財政が悪化しても顧みることなく浪費を続けた。

例えば、藩内寺社の建設や改築と多額の奉納金、城内本丸書院や江戸藩邸の造営、豪勢な能楽の遊びに巨額を費やすなどであった。藩主である殿様の一言は、至上命令として従わざるを得ないのである。

この浪費と実家への援助により④綱憲一代で御囲金を使い果たし、所領半減により

減収に喘ぐ藩財政のやりくりは、結局のところ藩士や領民の負担となり、臣下の実質的減俸となる「半知借上げ」、農民の年貢増率などを強いる結果となった。

### 3 米沢藩苦悩の始まり

#### (1) 綱憲の隠居

「元禄赤穂事件」は、元禄15年（1702年）旧12月15日未明に赤穂浪士が吉良邸に討ち入り、吉良上野介の首級を挙げ主君・浅野内匠頭の無念を晴らして終わる。

事件の発生は午前7時に米沢藩に知らされるが、病床にあった④綱憲は援軍を送ることをしなかった。

援軍を送らない判断は④綱憲一人によるものではなく、事件を察知した幕府老中から米沢藩に「出兵差止め命令」の使者が送られたからと言われている。江戸の街の隅々まで諜報機関を配置していた徳川幕府であるから、この討入劇は察知していた可能性がある。事件後は「赤穂の義士」と称えられ、300年以上過ぎた今も年末には必ず「忠臣蔵」のドラマ放映されることでも分かります。封建時代の花形事件の一つだったかもしれない。

江戸の町では事件から程なく芝居に取り上げられるが、集大成され「仮名手本忠臣蔵」となって上演されたのは大阪が始まりで、寛延元年（1748年）に人形浄瑠璃（竹本座）と歌舞伎（中の芝居）であった。翌年には江戸でも初演されている。但し、米沢市と置賜地方では、長く「忠臣蔵」の映画や芝居の上演はなされなかった。

④綱憲は「元禄赤穂事件」の翌年8月に隠居して嫡男の吉徳に家督を譲り、その翌年の宝永元年（1704年）享年42歳で死去した。一方吉良家は、上野介の後を④綱憲の二男・春千代が吉良左兵衛義周を名乗って家督を継ぐが、宝暦3年（1706年）に21歳で死去、以後吉良家は断絶となった。



歴代米沢藩主を祀る御廟（米沢市御廟町）



四代綱憲が眠る廟所

#### (2) 綱憲から後の藩主たち

④綱憲の隠居後は、嫡男・吉憲（1681～1722年）が五代藩主に就任したが、生来の病弱であった。それでも藩主の座にあること18年、享保7年（1722年）39歳で病没

した。

その後を継いで六代藩主となるのは⑤吉憲の長男・宗憲（1714～1734年）で、この時8歳であった。享保19年（1734年）19歳で病没。

⑥宗憲の後は、④綱憲の二男で⑥宗憲の弟・宗房（1717～1746年）が17歳で第七代藩主となるが、⑦宗房も兄と同じく病弱で延享3年（1746年）に29歳で病没した。

⑦宗房亡き後の八代藩主は、四男の重定（1720～98年）が後を継ぐ。

このように、④綱憲の子息たち三人が相次いで藩主の座に着いたことになり、⑥宗憲と⑦宗房の二人は病弱でしかも若年であれば、藩政に関わるのは無理であった。

この間、凶作による財政圧迫ばかりでなく、⑥宗憲の治世には幕府の御普請言付けで江戸城の「堀さらい」（お堀の浚渫）を命じられ、④綱憲の代から始まった赤字財政に拍車を掛けるように借財は増す中、「御普請言付け」は少ないときでさえ15,000両を費やしたといわれている。

兄弟の中で三人目となる⑧重定の治世と人物像については、九代藩主となる治憲、後の上杉鷹山を他家から養子に迎える事情とも関連する。

### (3) 初代景勝から九代鷹山までの在位等

上杉家の祖は、「越後の猛虎」の異名をもって知られる上杉謙信である。越後時代は実質年収200万石以上といわれた財力、鎌倉時代より関東管領（関東執事）として関わるなど東国きっての名門である。

会津への転封で120万石、徳川家康の時代に米沢に移されて30万石に減封、そして「末期養子」を認める代償として15万石に減じられ、奈落の底に転落するように辿る上杉家の命運だったが、越後時代からの家臣団を減らさず抱え、実質20万両（現貨幣価値で260億円）を越す巨額な御囲金を有しながらこれを使い果たして、御囲金を上回る借金を作ってしまった米沢藩であった。

ここまで述べてきたことと、藩主の在位等の概略を記しておこう。

氏名	藩主襲封と年齢	在位期間	没年と年齢	その他
初代・景勝	転封1601年45歳	～1623年	1623年、69歳	越後、会津から
二代・定勝	1623年、19歳	1623～1645年	1645年、41歳	景勝の長男
三代・綱勝	1645年、8歳	1645～1664年	1664年、27歳	定勝の長男
四代・綱憲	1664年、2歳	1664～1703年	1704年、42歳	吉良家から養子
五代・吉憲	1703年、22歳	1703～1722年	1722年、39歳	綱憲の長男
六代・宗憲	1722年、8歳	1722～1734年	1734年、20歳	吉徳の長男
七代・宗房	1734年、17歳	1734～1746年	1746年、29歳	吉憲の二男
八代・重定	1746年、25歳	1746～1767年	1798年、77歳	吉憲の四男
九代・治憲 (鷹山)	1767年、17歳	1767～1785年	1822年、72歳	高鍋藩秋月家から養子

#### (4) 八代藩主重定の治世



上杉重定画像

そもそも四男として生まれ育った⑧重定は、自分が藩主となって襲封する機会が巡ってくるとは毛頭考えもしなかった。しかし、兄で三男の貞千代は高家旗本・畠山家の養子となって家督を継いでおり、他に男子がいなかったせいで仕方なく藩主に指名された。

当初から藩政には関心を示さず、最も大事な藩の財政事情さえ知ろうとしないばかりか、自らは能楽に凝り、二の丸御殿にあった能舞台を本丸に移してもっぱら能の乱舞にいそしみ、藩内の「赤湯」や「小野川」などの温泉巡りに遊ぶのを常とし、生活も贅をこらし次第に暗君と陰口される

ようになっていく。

⑧重定の治世では、多額の借財を返すに苦勞するばかりで利子も嵩んでくる。⑤吉憲以降続いてきた藩士の俸禄（知行）の「半知借上げ」は常態になり、宝暦3年（1753年）、5年、6年と凶作が続く悲運も重なる。特に宝暦5、6年には数百人の餓死者を出したという。

この凶作を無視するように、宝暦3年末には徳川家の菩提寺である東叡山寛永寺（東京都台東区上野）根本中堂と仁王門の改修再建工事の「御普請言付け」があって、領民から7,000両の借上げを行い、「人別錢」や「軒錢」を課した他、大商人からの借金により、57,400両の大金を費やして2年間の工事を終えている。

藩士や領民の困窮は増大するばかりで、しかも以前は14万人であった藩内の人口が9万人へと減少した。その原因は、農民の藩外逃亡の他にも様々な要因が重なる。人口減少は、生産人口の落ち込みであり藩政に及ぼす影響も多大であった。

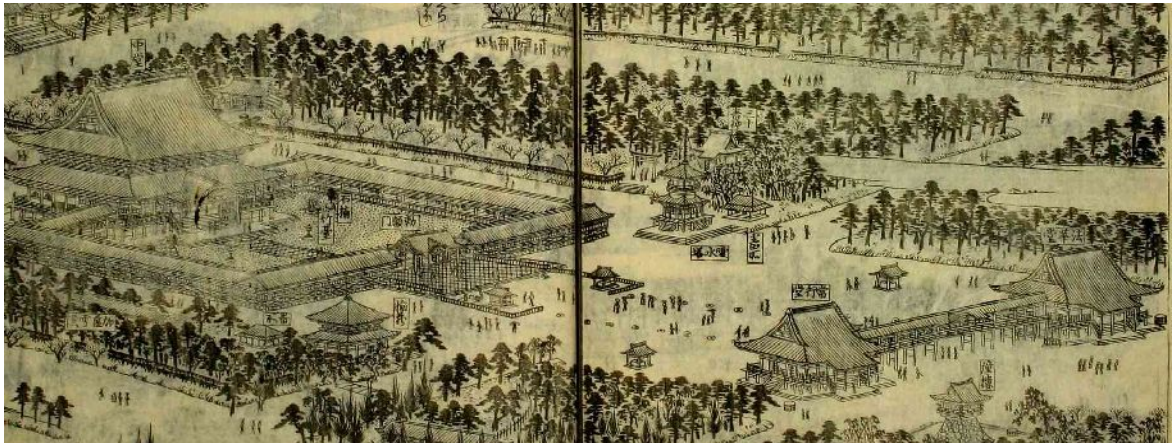
そこで、⑧重定は前代未聞の行動に出る。にっちもさっちも行かなくなった重臣たちの訴えに対し、宝暦10年（1760年）に亡き正室の実家である尾張藩を仲介に立て、米沢藩を幕府に返上して藩主を辞める（版籍奉還）願いを提出しようとした。驚いた尾張徳川藩八代の宗勝（1705～61年）は、早速使いを出して繰り返し諫めた結果、やっとのこと取り下げとなったのである。

⑧重定には藩改革の意欲がなく、改革の担い手にはなり得なかったが、それでも自身の贅沢好きの派手な生活によって、更に借財は増え続けた。

藩主が有する権力は絶対で、家臣や領民に対し生殺与奪（せいさつよだつ）の権を握っていた時代である。その上には、全国各藩を統括する幕府の権力があって、各藩を生かすも殺すも自在だったのが幕藩体制の特徴である。

藩主時代の⑧重定に対して評価は得られなかったが、世子である治憲に家督を譲り九代藩主を襲封させた後は、⑨治憲に全幅の信頼を寄せ、重大な事態が発生した場合

は「先の殿」として自ら藩士たちに⑨治憲支持を訴えて説得する場面を見ることができるので、それらは後に触れたいと思っている。



江戸名所図会（天保年間）、上野「東叡山寛永寺」境内（部分）

### (5) 森郡代の誅殺事件

⑧重定は、藩主になるずっと前から下級武士出身の森平右衛門利直（二人扶持3石）を寵愛した。⑧重定が藩主の座に着くとたちまち出世昇進し、御側役（側近）から侍頭（侍隊長）、郡代所頭取（地方長官）、小姓頭へと登り詰め、一躍250石取りと加増され、ついに藩財政の指図や具体策の実行権を握るまでになった。

森の政策は、藩の窮状を打開しようとする意図が全く見られない訳ではないが、各種役銭や租税の強化、年貢の取立て強化ばかりか、賞罰の独断専行、一族縁故者や腹心の要職登用、増禄や減禄に専横行為、御用商人との癒着と収賄、公金流用、三階建ての豪華な邸宅を建設するなど、目に余るようになってくる。

この独断的行為は、⑧重定を後ろ盾として行われた訳で、譜代の老臣たちは藩の将来を憂慮する危機感から度々忠告を行い、⑧重定にも改善要請を行うが効を奏さなかったため、宝暦13年（1763年）2月、江戸家老の竹俣当綱（1729～93年）が米沢に帰り、城内において譜代の老臣3人立会いのもと、森平右衛門に18ヶ条の「問罪書」（罪状を問う書）を示し反省を促すが無視されたため、当綱は仕方なく逃げる平右衛門を討ち取った。

勿論、カンカンになって怒ったのは⑧重定である。

『即刻、当綱を切腹させよ』と息巻いたが、重臣たちから「18ヶ条問罪書」を見せられ、仕方なく当綱の切腹を許さざるを得なかった。

森平右衛門の場合、⑧重定の寵愛をいいことにして、「虎の威を借（か）る狐」の故



竹俣当綱画像

実同然であった。人は思い通りに事が運ぶと凶に乗り易く、強欲が頭を持ち上げ傲慢になる。調子よく順調なのを自分の力からと勘違いし目先が濁ってしまう。よくよく慎みの心をもって、他者に対し謙譲と惻隱の心を養いたいものである。森の行為は真の武士道に反したから切り殺されたのであろう。

森を誅殺した竹俣当綱は、その後⑨治憲の手足となって改革に精出すが、後になって森同様の過ちを犯すことになる。人心の脆さは恐ろしい。

## (6) 藩財政逼迫の原因

会津藩から国替えの時点で、上杉家は越後時代から蓄めてきた 20 万両を越す御囲金を所持したと先に書いた。今の貨幣価値なら 260 億円以上と先に書いたが、とてもとても実効はその程度ではない大金である。

御囲金とは、有事に備えた軍事資金であって、この御囲金を吉良上野介の長男で四代藩主綱憲の代で全て使い果たし、⑤吉憲以降は赤字財政から脱出できないばかりか雪だるま式に膨らむばかり。⑦宗房の代で借財 20 万両以上。⑧重定に至って借金は 30 万両超となって行き詰まり、ついに版籍奉還を願い出るまでになった。

何故このような事態を招いたのか。そのいくつかを挙げてみよう。

### ア 家臣の数

上杉家は上杉謙信以来の戦国時代の雄として、格式と仁義人情特段に篤いのが特徴であり伝統としてきた。二度の減封にもかかわらず、越後や会津時代とほとんど変わらない家臣の人数を抱え、なお解き放ち（解雇）をしなかった。家禄（知行）はその都度減ぜられて会津時代の 8 分の 1 となり、極度に生活を圧迫し藩としての経費も嵩んだ。

例えば、山形県内の同規模である庄内藩酒井家（14 万石）なら、家臣数は 1900 人で、米沢はその 2.6 倍強の 5000 人であった。米沢藩は家臣の給与（知行）相当額で 129,500 石になるという。勿論そのような給与は払えるわけではない。

総人口の比率ならば、明治維新時で米沢藩の士族率が 23%、同規模の南部藩では 7%、秋田藩は 10%であったという。

### イ 藩主の資質

②定勝以降、いずれも愚昧と病弱あるいは若年だったり、藩政への関わりや尽力は不可の場合が多い。自身は収支バランスなど考慮しない身勝手、贅を尽くたて豪華な生活を好み、藩財政の健全化や立て直しに無関心であった。

### ウ 吉良家との縁組

三代綱勝の妹・参姫が万治元年（1658 年）、幕府高家衆である吉良義冬の嫡男吉良上野介義央に嫁ぎ、寛文 3 年（1663 年）に後の四代藩主となる綱憲が生まれる。藩主となった④綱憲は、藩財政の逼迫をよそに無制限に吉良上野介に援助支援を続けた結果、④綱憲の隠居時点で既に赤字財政に転換していた。

### エ 徳川幕府の普請役御

幕府が命じる普請役とは、本来は戦時に諸大名に課した軍役の延長とみることできるが、将軍家は諸藩の財力を蓄積させない意図の政策によって、普請役手伝いによる出費負担を強要した。幕府は全国諸藩を信用していなかったのである。

⑨治憲以前の米沢藩に対する主な御普請役手伝いだけでも次のとおで、1回当たりの出費は15,000両～50,000万両だったと推測される。

慶長19年(1614年)	越後高田藩築城	①景勝の代
寛永13年(1636年)	江戸四谷通りの堀さらい	②定勝の代
寛永14年(1637年)	江戸城増築	②定勝の代
寛永20年(1643年)	江戸城二の丸普請	②定勝の代
享保18年(1733年)	江戸城の堀さらい	⑥宗憲の代
宝暦3年(1753年)	寛永寺根本中堂、仁王門の改修再建工事	⑧重定の代

#### オ 地理的条件の不利

米沢盆地(山断層崖陥没構造型)は外界との交通確保が不十分であった。領内からは二井宿峠(白石市へ)、鳩峰峠(福島市へ)、板谷峠(福島市へ)、白布峠(松原湖方面)、玉川峠(新潟県)、小国郷から荒川峡(関川村へ)など、山や谷を超えて流通がなされていた。最上川の水運は天正時代(1573～94年)以前から全国でも有数の舟運が行われたが、米沢藩がその恩恵を受けるのは難所の開削に成功した元禄5年(1693年)以降のことである。

峠越えの労力と経費、舟運になっても運賃と他藩を通行する通行税の支払いにより、得る利は極めて少ない。又、物流の中心となる関西市場との結び付きの希薄さにつながった。

#### エ 凶作と大火の災害

藩内は数年おきに起きた大凶作と餓死者、城下を焼き尽くす大火の発生、疫病の流行による人口減少など、そのいずれも藩財政を圧迫した。

米沢、置賜郡部の秋の訪れが早く春が遅いのは、周辺を高山に囲まれているせいもある。名だたる豪雪と低温地帯であり、寒冷気候に見舞われるのが常で、米沢上杉藩が存在した(1601～1871年)270年間で、凶作飢饉に見舞われたのが43回を数え、その都度藩の財政は貧窮ヲ余儀なくされた。

稲作は天候に左右されやすく、山地から流れ出る水は冷たい。今と違って寒冷地向けの品種がなかった時代、作柄は少しの天候異変によって大きく影響された。

家の構造と火の使用法、消火技術の未発達は大火になり易い。⑧重定の代でさえ城下町を焼け尽くす2度の大火に遭っている。

(つづく)

ここまでの2回は掲題の前半分で、上杉藩を理解してもらうプロローグであった。

来月から、いよいよ上杉鷹山の登場となる。鷹山は、借金地獄から脱出できたのか、できなかったのか。鷹山はどのような考えの持ち主でどんな行動したのかなど、武道修業との関連で私が書きたかった部分は来月以降となる。